

盲導犬とパートナーの笑顔

専攻科二年 岸上 沙布

あなたは盲導犬についてどの程度知っていますか？そう訊かれたらどう答えるだろう？

盲導犬を実際に見たことのある人はどのくらい居るだろう？現在日本で働いている盲導犬の数は952頭(2006年3月)しかいないから実際に見たことのある人は少ないだろう。日本で盲導犬を欲している人は5千人近く居るというのに盲導犬の実働数が1000頭にも満たない現状をどれくらいの人知っているだろうか。

盲導犬を初めて見たとき、その凛々しさに私は驚いたのを覚えている。まっすぐ前を見てパートナーを誘導する、仕事を生きがいとするその姿はとても格好が良かった。毎朝見かけた颯爽と歩く盲導犬とそのパートナーの姿がとても印象に残っている。あるときそのパートナーは変わらず、だが盲導犬が変わっているのを見て私はすごく悲しかったのを覚えている。人間の寿命と、犬の寿命は同じではなく、更に「盲導犬」の寿命は犬のそれよりはるかに短いのだと身をもって感じた。命の儚さと切なさをあれほど悲しく感じたことはない。

盲導犬は何度も何度も別れを味わわなければならない。生みの親との別れ、パピーウォーカーとの別れ、パートナーとの別れ。死ぬまでずっとパートナーと一緒に「盲導犬」の仕事はできない。リタイアした後パピーウォーカーの元に戻れる確率はきわめて低い。盲導犬の一生は別れの連続である。しかし、盲導犬は淋しさを滲み出すことなくまっすぐ前を向いてパートナーと歩んでいく。別れは人を強くする、というのが犬も同様に別れの度に強くなり、そして新しい出会いの度に胸を高鳴らせるのであろう。だから盲導犬は強くたくましく輝いているように人の目に映るのだと思う。

盲導犬の一生はもどかしく、思い通りにいかないものだとは私は毎回盲導犬の話を書くたびに思う。パートナーとずっと寄り添っていたいのに体が思うように動かなくなってしまったリタイア犬、パートナーを病で失ってしまったクイール、盲導犬として育てられたのににもかかわらず一度も盲導犬として働くことの無い犬。盲導犬を欲する人はたくさん居るのに一気に世の中に盲導犬を育成し輩出することは不可能であること。盲導犬の育成にかかる費用不足、盲導犬を育成するトレーナーの数不足。全てが思うようにいかず、もどかしい。年々少しずつマスメディアの力を経て盲導犬の実働数は増えてきている。もっともっとまだ盲導犬に出会っていないパートナーに盲導犬と出会ってもらうためには私たち一人ひとりの意識と行動が必要だと感じた。小さなことでいいから盲

導犬のために、目が不自由な人のために、社会のために、そういった動きが必要だと思った。

毎朝見かけた盲導犬とそのパートナーは今日もまた一緒に歩んでいるだろう。いつか小さな子供が大きな声でかけた「おはようございます」の声に満面の笑顔を浮かべたパートナーの顔が脳裏に浮かぶ。目が見えない人の目の肩代わりをする盲導犬に、そのパートナーに、もっともっと明るい世界を見せてあげたい。そう思った瞬間をこの本は思い出させてくれた。

石黒健吾・盲導犬クイールの一生 文藝春秋